

若林明雄先生を送る

礒 部 智加衣

若林明雄先生が、千葉大学文学部・心理学講座に助教授として赴任されたのは1999年4月のことである。以来、22年間にわたって、千葉大学で教育・研究の日々を過ごされたことになる。

その間、文学部・大学院人文公共学府（博士前期課程）・大学院融合理工学府（博士後期課程）だけでなく、千葉大学における教育に広く貢献していただいた。長年にわたりお引き受けくださった教養展開科目（心理学A）は非常に学生から人気のある講義であり、毎年500名以上の学生が受講していた。受講者数が毎年多いため普通の事務が（楽勝科目ではないかと疑い？）過去のデータを調べたところ、成績評価は厳しい（評価点平均は普遍教育科目で最低、A以上の評価は減多になく、多いときは受講者の約3分の1程度が不可である）ことが判明した。新型コロナウイルス流行のためにメディア授業を実施することとなった最終年度は、事前の受講者制限がシステムの都合上不可能であったため、800名を超える受講者数となった。また、千葉大学子どものこころの発達教育研究センター教授も兼任され、医学部においても教育・研究などを担当された。さらに、日本にとどまらず、ケンブリッジ大学、グラーツ工科大学、およびフンボルト大学において客員教授としてご在籍されている。

ご研究のテーマとしては、「認知的能力やパーソナリティを中心とした心理学的個人差の測定とモデル化」、「パーソナリティ測定尺度の開発、社会的認知能力（心の理論能力）の測定法」、「自閉症スペクトラム傾向の測定、診断法」、「各心理的指標と脳の構造的・機能的特徴との関連性」などである。若林先生の論文の被引用数は英語論文（査読あり）のみでも1,606件に及ぶ（2020/12/10現在、Research Gate調べ）。ご研究の一部は、心理臨床の現場で応用されており、中でも「AQ: Autism-Spectrum Quotient（日本語

版)」は、千葉大学医学部を含む全国100以上の研究機関・医療機関で使用されている。AQ (Autism-Spectrum Quotient) とは、自閉症スペクトラム指数のことであり、高機能自閉性障害者やアスペルガー障害者 (ASD者) と定型発達者の識別を可能にする基準である。近年では、自閉症スペクトラム、心の理論関連能力、認知スタイルなどの個人差について、パフォーマンス課題による測定だけでなく、認知神経科学的なアプローチによる心理的機能のメカニズムの解明にも取り組まれている。

ご研究を進められる中で、若林先生はこれまで多くの研究者との協力関係を築かれてきた。ケンブリッジ大学のBaron-Cohen教授とは、15年以上共同研究を継続しており、グラーツ大学のNeubauer教授とは20年来にわたり研究上の協力関係にある。また心的機能の個人差の脳画像研究では、fMRIの使用も含め、東北大学加齢医学研究所の瀧靖之教授と10年来共同研究を続けている。その他、フンボルト大学、ドレスデン工科大学、ライプチヒ大学 (以上ドイツ)、ウィーン大学、グラーツ工科大学 (以上オーストリア) とは、研究上の協力関係をお持ちだ。研究交流をきっかけとし、研究者 (とその家族) との個人的交流も多く、たとえば、Baron-Cohen教授を、家族全員とともに、最近では現オーストリア心理学会会長Neubauer教授も家族とともに、自宅に迎えられている。若林先生のお人柄を伺えるエピソードである。

日頃の若林先生といえば博識で、ヨーロッパでの生活や文化、音楽のことなどをユーモラスにお話してくださる。著者も学生らと共に先生のお話に聞き惚れることが常であった。この原稿を書くにあたりご本人に伺ったことによると、高校時代は音楽大学受験を考えていたこともあり、助手時代以降30歳代半ば頃までは、音楽の仕事 (作曲・編曲など) も行っていた。音楽以外にも趣味は多く、(お叱りを受けるかもしれないがとおっしゃられながら) 研究もある意味では趣味の一つという面があるかもしれないとのことで、専門は異なるが、メンターとして個人的にお世話になった大山正先生からは「趣味の音楽などの時間を研究に使えば、今の2倍以上の業績を上げられるだろうに」とお叱りを受けたことがたびたびあるとのことである。また、Universal Edition (マーラーの交響曲などのクラシック音楽の楽譜出版社) ウィーン支所長とは個人的に親しく、ウィーン楽友協会 (Musikverein

Wien) のメンバーでもある (退職後の 1 つの目標は、ブルックナーが未完成のまま残した交響曲第 9 番の第 4 楽章を完成することで、材料となるスケッチや断片類の資料は収集済みとか)。また、Sherlock Holmes Society of London のメンバーでもあり、メンバーとともにヴィクトリア時代の扮装でロンドンからスイスのライヘンバッハの滝 (ホームズと宿敵モリアーティ教授が最後に争った場所) まで行ったこともあるそうだ (ご本人としては、ホームズよりボワロの方に親近感があるようだが)。

ご本人は「趣味の一部」とおっしゃられているが、決して趣味のレベルにとどまっておらず、指導された学生の研究をみるだけでも、先生の幅広い知識が興味深い研究に繋がっていることがわかる。そのため多くの学生が若林先生のゼミを志願し、常に若林ゼミ (人格心理学ゼミ) は学生であふれていた。入学以前より若林ゼミを志望する学生も少なくない。卒業論文指導では、全てのゼミ生が必ず実験を実施するという方針であり、そのご指導をなさってきた先生のご負担はかなりのものであったことが伺える。若林先生のご指導の下、研究のとりことなり修士・博士課程と研究を続ける学生も多く、研究職につき活躍している者も複数いる。著者がご一緒させていただいた約 10 年間だけでも、先生を慕い卒業の際に涙する学生を何人も見てきた。

このように、千葉大学、文学部、そして心理学専修の発展にご尽力くださった若林先生が、2021 年 3 月末日をもってご定年を迎えられる。きっと先生は「勘弁を」と苦笑なさると思いますが、まだまだ講座に残り教えていただきたい、支えていただきたいという思いは強くあります。しかしそれは叶わず、送る言葉を言わなければなりません。若林先生、長年のご功労に敬意を表し心より感謝申し上げますと共に、先生の今後のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。

若林明雄先生 略歴

学歴

- 1979年 3 月 日本大学文理学部心理学科 卒業
1984年 3 月 日本大学大学院文学研究科心理学専攻 単位取得満期退学
1995年 9 月 博士（心理学）（日本大学）

職歴

- 1984年 4 月 日本大学助手（文学部）（1988年 3 月まで）
1995年 4 月 上越教育大学大学院助教授（学校教育学研究科）（1999年 3 月まで）
1999年 4 月 千葉大学助教授文学部（2005年 8 月まで）
千葉大学大学院自然科学研究科兼任（2007年 3 月まで）
2005年 9 月 千葉大学教授文学部に昇任
2007年 4 月 千葉大学大学院融合科学研究科（博士後期課程）兼任（2017年 3 月まで）
2015年 4 月 千葉大学子どものこころの発達教育研究センター教授（兼任）
2017年 4 月 千葉大学大学院人文公共学府（博士前期課程）に配置換
千葉大学大学院大学院融合理工学府（博士後期課程）に配置換
2018年 4 月 千葉大学教授大学院人文科学研究院に配置換

併任教員歴

- 2004年 ケンブリッジ大学（連合王国）客員教授（実験心理学・精神医学部）（2005年まで）
2009年 ケンブリッジ大学（連合王国）客員教授（発達精神医学部）
2012年 グラーツ工科大学（オーストリア）客員教授（Brain Computer Interface）（2010年まで）
2013年 フンボルト大学（ドイツ）客員教授（心理学部）
2002年 放送大学客員教授（2012年まで）

非常勤講師歴等

東京大学大学院総合文化研究科

東京大学教養学部

慶応大学大学院社会科学研究科

関西学院大学大学院文学研究科

立教大学文学部

聖心女子大学文学部

JSPS特定国派遣研究者

オーストリア (OeAD) : 心の理論の認知処理過程の領域特殊性に関する神経生理心理学的アプローチによる検討 (2012年)

ドイツ (DAAD) : 認知機能の個人差に関する神経生理学的基盤の検討 (2013年)

学会・社会活動等

日本心理学会, American Psychological Association, American Psychological Society, European Association of Personality Psychology, Society for the Study of Personality and Individual Differences 等会員

日本心理学会常任編集委員

Journal of Autism in Adulthood 編集委員

World Conference on Personality, Advisory Board, 等

若林明雄先生 主要研究業績

学術論文 (学術雑誌・査読有のみ)

Are personality disorders extreme variants of normal personality ?

Queries about the validity of the Five-factor Model of Personality to diagnose personality disorder. *Psychologia*. <https://doi.org/10.2117/psysoc.2020-B002>. (2020).

The HEXACO-100 across 16 languages: A large scale test of measurement invariance. *Journal of Personality Assessment*, 102, 714–726. (2020).

A cross-cultural study of autistic traits across India, Japan and the UK. *Molecular Autism*, 9, 52. <https://doi:10.1186/s13229-018-0235-3>. (2018).

Individual Differences and the effect of face configuration information in the McGurk effect. *Experimental Brain Research*, 234, 973–984. (2018).

他者の痛み経験時の事象と表情が観察者の痛み理解と不快感に与える影響
認知心理学研究, 15, 13–19. (2017).

The relationship between Systemizing-Empathizing and random number generation. *International Journal of Psychology*, 51, 906–907. (2016).

Is empathizing in the E-S theory similar to agreeableness? The relationship between the EQ and SQ and major personality domains. *Personality and Individual Differences*, 76, 88–93. (2015).

The relationship between level of autistic traits and local bias in the context of the McGurk effect. *Frontiers in Psychology*, 6, 891. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2015.00891>. (2015).

A sixth personality domain that is independent of the Big Five domains: The psychometric properties of the HEXACO Personality Inventory in Japanese sample. *Japanese Psychological Research*, 56, 211–223. (2014).

How are autism and schizotypy related? Evidence from a non-clinical

- population. *PLoS ONE*. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0063316>. (2013).
- Individual differences in empathizing and systemizing in Japanese children: Psychometric properties of the children's versions of the Empathy Quotient (EQ) and Systemizing Quotient (SQ). *Japanese Psychological Research*, 55, 12–19. (2013).
- The correlation between brain gray matter volume and empathizing and systemizing quotients in healthy children. *NeuroImage*, 60, 2035–2041. (2012).
- Do the traits of autism-spectrum overlap with those of schizophrenia or obsessive-compulsive disorder in the general population? *Research in Autism Spectrum Disorders*, 6, 717–725. (2012).
- Sex differences in two fundamental cognitive domains: Empathizing and systemizing in children and adults. *Journal of Individual Differences*, 33, 24–34. (2012).
- The Motion Picture Mind-Reading Test: Measuring individual differences of social cognitive ability in a young adult population in Japan. *Journal of Individual Differences*, 32, 55–64. (2011).
- Determining differences in social cognition between high-functioning autistic disorder and other pervasive developmental disorders using new advanced “mind-reading” tasks. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 5, 554–561. (2011).
- Neuropsychological approach to identifying risky driving behaviors. *IEEE Intelligent Systems*, 25, 91–96. (2010).
- On relationships between digit ratio (2D : 4D) and two fundamental cognitive drives, empathizing and systemizing, in Japanese sample. *Personality and Individual Differences*, 49, 928–931. (2010).
- Sex differences in the relationship between cortisol levels and the Empathy and Systemizing Quotients in humans. *Neuroendocrinology Letters*, 28, 445–448. (2007).

- Psychometric properties of the Padua Inventory in a sample of Japanese University students. *Personality and Individual Differences*, 43, 1113–1123. (2007).
- Empathizing and Systemizing in adults with and without Autism-Spectrum Conditions: Cross-cultural stability. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 37, 1823–1832. (2007).
- The Autism-Spectrum Quotient (AQ) Children’s version in Japan: A cross-cultural comparison. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 37, 3, 491–500. (2007).
- 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 児童用・日本語版の標準化：高機能自閉症・アスペルガー障害児と定型発達児による検討. 心理学研究, 77, 534–540. (2007).
- Development of short forms of the Empathy Quotient (EQ-Short) and the Systemizing Quotient (SQ-Short). *Personality and Individual Differences*, 41, 929–940. (2006).
- Predicting Autism Spectrum Quotient (AQ) from the Systemizing Quotient-Revised (SQ-R) and Empathy Quotient (EQ). *Brain Research*, 1079, 47–56. (2006).
- Are autistic traits an independent personality dimensions?: A study of the Autism-Spectrum Quotient (AQ) and the NEO-PI-R. *Personality and Individual Differences*, 41, 873–883. (2006).
- ‘Autistic’ traits in non-autistic Japanese populations: Relationship with personality traits and cognitive ability. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 36, 4, 553–566. (2006).
- The Autism-Spectrum Quotient (AQ) in Japan: A cross-cultural comparison. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 36, 2, 263–270. (2006).
- Empathizing-Systemizingモデルによる性差の検討：Empathizing指数 (EQ)とSystemizing指数(SQ)による個人差の測定. 心理学研究, 77, 271–277. (2006).

- 自閉症スペクトラム指数（AQ）日本語版の標準化：高機能臨床群と健常人による検討. 心理学研究, 75, 78-84. (2004).
- 健常人における自閉症スペクトラム仮説の妥当性：大学生の専攻分野とAQ得点との関係からの検討. 自閉症スペクトラム研究, 2, 11-20. (2003).
- 対処スタイルからみた現職教員のストレス場面での不安と生理的指標の変化. 心理学研究, 72, 465-474. (2002).
- 対処スタイルと日常生活および職務上のストレス対処方略の関係：現職教員による日常ストレスと学校ストレスへの対処からの検討. 教育心理学研究, 48, 128-137. (2000).
- 解離性同一性障害（多重人格障害）の症状形成モデル試論：個人内同一性間健忘としての多重人格症状. 精神医学, 41, 755-762. (1999).
- ‘解離性同一性障害（多重人格障害）’の精神病理学的・認知心理学的検討：心因性記憶障害としての多重人格症状. 性格心理学研究, 6, 122-137. (1998).
- パーソナリティ研究の動向と問題点. 教育心理学年報, 34, 61-73. (1995).
- 3気質類型・複合構造モデルとパーソナリティのフラクタル性：パーソナリティ統合理論構築の試み. 性格心理学研究, 2, 2-22. (1994).
- TTIQ-性格検査の標準化-3気質類型・複合構造モデルと5性格特性次元に
もとづく質問紙法性格検査の作成. 応用心理学研究, 19, 61-84. (1994).
- パーソナリティ研究における“人間-状況論争”の動向. 心理学研究, 64, 296-312. (1993).
- PBPI-意欲検査の標準化-社会行動における個人的指向性測定の試み-. 応用心理学研究, 17, 1-19. (1992).
- 映画における性格描写とその理解：映像化されたシャーロック・ホームズの
性格（映像理解における心理学的アプローチ）. 映像学, 46, 71-86. (1992).
- George A. Kellyの個人的構成概念の心理学：パーソナル・コンストラクト
の理論と評価. 心理学評論, 35, 311-338. (1992).
- パーソナリティ類型論における循環性気質の検討：循環性気質に見られる同
調性・執着性の構造的把握の試み. 心理学研究, 58, 1-7. (1987).

質問紙法検査にもとづくパーソナリティ類型の検討, 心理学研究, 57, 315-319. 1986 VERAC-性格検査の標準化, 応用心理学研究, 11, 19-32. (1986).

著書（単著のみ・共著は省略）

パーソナリティの類型論的アプローチによる研究：Kretschmerの気質類型論の再検討とパーソナリティ理論モデル構築の試み（心理学モノグラフ No. 30）日本心理学会 2000
パーソナリティとは何か：その概念と理論 倍風館 2009

科学研究費等取得外部資金

（科研費・千葉大学着任以降）

自閉症スペクトラム障害の診断精度向上と簡易スクリーニング検査の開発（代表・基B）2020年～2022年

ヒトの認知機能の「個性」の基本構造のモデル化と脳画像解析による脳神経基盤の解明（代表・新学術領域）2016年～2020年

多様な「個性」を創発する脳システムの統合的理解（新学術領域）2016～2020
「個性」創発脳システムの統合的理解を拓く国際的データシェア・プラットフォームの構築（新学術領域）2016年～2020年

社会的認知能力の個人差と脳皮質活動・視線サイモン効果との関連性に関する実験的研究（代表・基盤C）2017年～2019年

社会的認知能力の個人差と視線・脳皮質活動との関連性に関する研究（代表・基盤C）2014年～2016年

社会的認知能力の個人差とその神経生理学的基盤に関する研究（代表・基盤C）2011年～2013年

一般（定型発達）成人における社会的認知能力の個人差の測定法に関する実験的研究（代表・基盤C）2008年～2010年

健常児と広汎性発達障害児の心の理解能力の教育可能性に関する実験的研究（代表・基盤C）2004年～2006年

幼児・児童の心の理解能力の発達とその教育可能性に関する実験的研究（代

若林明雄先生を送る

表・基盤C) 2001年～2003年

児童用パーソナリティ検査の標準化とその利用による教育的効果に関する研究
(代表・基盤C) 1997年～1999年

(その他外部資金)

トヨタIT研究センター (安全運転サポートシステムへの心理・生理学的指標の適用) 2006年～2007年

学内職務等

文学部行動科学科長：2010年度 (2010年10月～2011年3月)、2012年度

文学部将来構想委員長：2006年度